

## メッセージアウトライン マタイの福音書9：14～17 「なぜ断食をしないのか」

[14]「それから、ヨハネの弟子たちがイエスのところに来て、『私たちとパリサイ人はたびたび断食をしているのに、なぜあなたの弟子たちは断食をしないのですか』と言った」

前回の箇所では、イエスはパリサイ人たちの質問に答えて「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためです」(9:13)と言われた。そして私たち一人ひとりもイエスによって招かれた罪人であったことも教えられた。今日はその続きの14節からであるが、ここではヨハネの弟子たちが登場してきている。このヨハネとは人々に悔い改めのバプテスマを授け、イエスの福音伝道のための道ぞなえをしたバプテスマのヨハネのことである。→マタイ3章 そのヨハネの弟子たちが断食についての質問を持ち込んできたのである。ヨハネとイエスは親類関係にあった。→ルカ1:36

しかしヨハネ3:22~30を見るとヨハネに弟子入りする者が減り、逆にイエスのバプテスマを受ける者が増えて来たので弟子たちがヨハネに苦情を言ったことが記されている。それゆえヨハネの弟子たちはそうしたことから嫉妬心をもってイエスに抗議する側に立って、敵であるはずのパリサイ人たちと歩調を合わせてもよいという気持ちになっていたのであろう。当時はイエスと弟子たちの生活様式は、見たところパリサイ人や律法学者たちだけではなく、味方であるはずのヨハネのグループからも異端のように見られ、理解してもらえぬほどの独特さがあったということになる。そしてその独特さはどこにあったかと言えば、ヨハネの弟子たちが質問している「断食」についてであった。つまり、イエスとその弟子たちはユダヤ人が守るべき「断食」と言う習慣を破っているのではないかと言うのである。ユダヤ人が守るべき公認の断食は三つあった。①贖罪の日の断食(罪の贖いと神との和解を完成させる重要な年中行事(第七月[チスリの月＝太陽暦の9月半ばから10月半ばにかけての一个月]の十日 レビ記16章) ②プリムの前日 (第十二の月[アダルの月＝太陽暦の2月半ばから3月半ばにかけての一个月]の十三日 エステル9:17) ③エルサレム陥落を記念する第四の月 (タンムズの月＝太陽暦の6月半ばから7月半ばにかけての一个月の第九日 エレミヤ52:6~7) さらにパリサイ人たちはそれに加えて週に二度断食していた。→ルカ18:12 また干ばつで雨が降らない時や大規模な災害、疫病などの時にも市民全体に断食が布告されるということもあった。そのようにユダヤ人にとっては罪の悔い改め、神に会う備え、神に切実に何事かを訴えるために断食は身近なことであった

が、イエスとその弟子たちにはそのような様子が見られなかったのである。

このバプテスマのヨハネの弟子たちの質問に答えてイエスは三つのたとえを語られる。

[15]「イエスは彼らに言われた。『花婿に付き添う友人たちは、花婿と一緒にいる間、悲しむことができるでしょうか。しかし、彼らから花婿が取り去られる日が来ます。そのときには断食をします。』」

ここでイエスのご自分を「花婿」に、そして弟子たちを「花婿に付き添う友人たち」とたとえておられる。旧約のイザヤ書62:1~5でも来るべきイスラエルの救いの日には「花婿が花嫁を喜ぶように、あなたの神はあなたを喜ぶ」と預言されている。このイエスこそイスラエルの人々が待ちに待った花婿、救い主なのであった。それゆえ、今この時、イエスの弟子たち、クリスチャンたちは四六時中花婿なるイエスとともにいるわけなので、断食する必要はないとイエスは言われているのである。しかし、弟子たちもやがてイエスの十字架の死によってしばらく離される時が来る。そういう悲しい事態が起こった時には悲しみのあまり断食することになる。また必要に応じて何事かを熱心に主に願うために断食と祈りをすることもある。→マタイ4:2、6:16~18、使徒13:2~3、14:23

[16]「だれも、真新しい布切れで古い衣に継ぎを当てたりはしません。そんな継ぎ切れは衣を引き裂き、破れがもっとひどくなるからです」

古い着物は全体にくたびれていて、少しの無理があっても耐えられず破れてしまう。そこへ真新しい布切れで強い継ぎ当てを入れると、継いだ部分は丈夫になっても、古いほうに無理な力がかかって破れてしまう。それゆえこのたとえの要点は、神に従う生き方は部分的に継いだり貼ったりして保つべきものではなく、全体を新しいものに改めなければならないということなのである。キリスト者としての新しい生き方の一部だけ取って古いユダヤ教に当てはめ、それを一体化することはできないのである。キリストとともに生きるキリスト者にとって、古い教えに従って断食することは無理があるのである。

[17]「また、人は新しいぶどう酒を古い皮袋に入れたりはしません。そんなことをすれば皮袋は裂け、ぶどう酒が流れ出て、皮袋もだめになります。新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れます。そうすれば両方とも保てます」

この「皮袋」は今でもアラビアの遊牧民などが用いているが、羊ややぎの首や足を切り、そして骨と内臓を取り出し、残った部分を裏返しにして、四

つ足がついていた穴を縫って綴じ、首の切り口を袋の口にして水や酒や油を入れる袋にしたものである。

このような皮袋は新しいうちは弾力性があって丈夫であるが古くなってしまうと発酵力の強い酒などを入れると張り裂けてしまう。そして新しいぶどう酒は発酵力が強いのである。このたとえば、中身が生き生きとした酒、発酵する力が強いぶどう酒であることを前提にしている。そして主イエス・キリストの教え、主にある新しい生き方こそが新しいぶどう酒であり、新しい皮袋なのである。

このことに関連してコロサイ2:16~23を参照したい。

「こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは祭りや新月や安息日のことで、だれかがあなたがたを批判することがあってはなりません。これらは、来たるべきものの影であって、本体はキリストにあります。自己卑下や御使い礼拝を喜んでいる者が、あなたがたを断罪することがあってはなりません。彼らは自分が見た幻により頼み、肉の思いによっていたずらに思い上がって、かしらにしっかり結びつくことをしません。このかしらがもとになって、からだ全体は節々と筋によって支えられ、つなぎ合わされ、神に育てられて成長していくのです。もしあなたがたがキリストとともに死んで、この世のもろもろの霊から離れたのなら、どうして、まだこの世に生きているかのように、『つかむな、味わうな、さわるな』といった定めに縛られるのですか。これらはすべて、使ったら消滅するものについての定めで、人間の戒めや教えによるものです。これらの定めは、人間の好き勝手な礼拝、自己卑下、肉体の苦行のゆえに知恵のあることのように見えますが、何の価値もなく、肉を満足させるだけです」

かつてはユダヤ教の急進派であったサウロはクリスチャンを次々に捕らえて牢に放り込んでいた男であったが、あのダマスコまでクリスチャン逮捕のために遠征して行った時に、死より復活されたキリストに出会い、自分が正しいと思って迫害してきたクリスチャンこそ正しく、そして彼らが信じるキリストこそ本物の神であり、救い主であることに愕然として気づかされ、その後彼は悔い改めてクリスチャンとなり、神のみこころにより当時の世界を股にかけて伝道する使徒、伝道者として殉教の死に至るまでイエス・キリストの救いの福音を宣べ伝える者となった。彼はローマの市民権を持っており、後にギリシャ名のパウロという名を用いることになる。その名を使うことが異邦人伝道に有効であったからであろう。

そのパウロがコロサイ教会のクリスチャンたちに書き送った手紙で、クリスチャンは食べ物や飲み物、また日の巡りなどによって批判されてはならず、「つかむな、味わうな、さわるな」などという禁欲主義の規則に束縛されて

はならないと力強く教えている。それはなぜか。それはそういう外側から、形式の上から信仰生活をしていくということは、肉を誇り、自分自身を満足させるだけであり、肉の欲するままの欲望に対しては何の効き目もないというのである。大切なことは信徒一人ひとりが、かしらなるキリストにしっかりと結びつき、そのキリストがもとになってキリストのからだである教会は節々と筋によって支えられ、つなが合わされ、神に育てられて成長していく、すなわち、主にあって助け合い、支え合い、協力しあいながら成長し、キリストのからだなる教会を形作っていくのである。

クリスチャンの生き方とは外側から締め付けていくものではない。そうではなく、この新しいぶどう酒のたとえのように内側からほとぼしるエネルギーによって自然にいつしか形作られていくものなのである。私たち信仰者はイエス・キリストを自分の救い主として信じ受け入れた時から三位一体の神である助け主なる聖霊が与えられており、その聖霊によって内側から変えられていくのである。内側すなわち心から変えられ、悪癖も悪い素行も罪深い生き方からも離れ、きよめられ、神のみこころにかなう者へと変えられていくのである。

神は私たちを愛しておられ、私たちを死と滅びから救うために、そのひとり子イエス・キリストをこの世に人として送ってくださった。イエスはこの地上を人として三十三年間歩まれ、私たち人間の弱さ、愚かさ、苦しみ、悲しみ、罪深さをよくご存じであり、最後にご自分の民であるユダヤ人のねたみのために十字架にかけられ死なれた。しかし、その十字架の死こそ私たちが受けなければならない神のさばきの身代わりの死であり、私たちの罪の贖いのための死であった。このイエス・キリストの死は私の罪のためであったと知り、彼を自分の救い主として信じ受け入れる者は救われるという道を開いてくださったのである。→ヨハネ3：16

イエスはバプテスマのヨハネの弟子たちに答えて、断食や旧約の様々な儀式律法を守る方法ではなく（人はだれも、律法を行うことによっては神の前に義と認められない→ローマ3:20）、ご自身の十字架の死による罪の贖い（すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して義と認められる→ローマ3:23-24）によって人が救われる時代、新しいぶどう酒を新しい皮袋に入れる時代が来ているのだと言われたのである。

私たちも花婿キリストに付き添う友人、真新しい布、新しいぶどう酒にたとえられている者としてかしらなるキリストにしっかりと結びつき、それにふさわしい生き方をしていく者になりたい。